

学習指導要領の実施となる。アクティブラーニングから始まり「主体的対話的で深い学び」が実現できる方向に定まった。国語科授業改善について、あらためて次のことを考えている。

提案1 <国語科を人間力を育てる教科としてとらえ国語科で「生きる力」を育てるとは何か ということ を授業の中で考え続ける>

国語科でなくても、学校全体で考えることである。時には「子ども理解」「学級経営」の問題として片付けてもよい内容である。しかし、国語科は、言葉についての資質・能力を育てることが目的である。「言葉で考える」ことは授業の基本である。国語科授業が評価されるのは、まず、学級の国語力である。「指示が聞ける」「友達に不快な言葉を使わない」などを本気で指導をしているかという問い続けることである。国語科の授業は「おもしろくない」というのが一般的な声である。「おもしろい」と思える以前に、国語は大事であるという意識を子どもに育てることに力を注いでいるかという問い直すことである。教師と一部の子のやりとりが中心となることがあっても、やりとりの中で、国語の力を育てるという目標を持って授業を進めることが「主体的対話的で深い学び」の実現につながる。

提案2 <国語学習力を育てるために授業の仕組みを考える>

国語学習力は興味・関心・意欲の側面と継続・積み上げが基盤にある。授業は、国語を学ぶ喜びがないと学習力の基盤は育たない。そのためには、授業の仕組みを変える必要がある。子どもが学習を続ける段取りは教師の仕事である。学習力を育てる視点で授業を創造する。たとえば、次のような学習過程である。

- ①教材の全体を理解させるための読みを繰り返す。
- ②「学習の手引」を自分の力で進める。
- ③学習集団として学習を進めると成果があると思える場面を学び合う。
- ④学習成果の確認をする。

ここでいう①は、学習の見通しを持つための耕しの時間である。音読は大事である。が家庭学習が多かったことから、「学習の手引」が活用できる力を育てるための第一段階と捉えると、本来の音読指導に道が拓く。

提案3 <国語の授業はまず、教材と謙虚に向かう学習習慣を育てる>

文章に叙述されている言葉との出会いを大事にすると、「考えよう・調べよう・確かめよう」という気持ちが生まれる。その気持ちは、「この文から」「この言葉から」になり、「同じ所はどこか。違うところはどこか。私だっただうするか。根拠を明らかにする」を意識した学習になる。学習を進める力は自問自答を繰り返す学習習慣を育てる